

翻弄60年人生取り戻す

森永ヒ素ミルク事件

約1万3000人の乳児が被害を受け、直接の原因で約130人が死亡した森永ヒ素ミルク中毒事件から今年で60年を迎え、13日に和歌山・高野山で記念式典が行われる。被害者たちは節目の年に、事件に翻弄された人生を見つめ直している。

きょう高野山で式典

定時制高校を卒業
「母より長生きを」

大阪府豊中市の渡辺義広さん(61)は生まれつき脳性まひだが、森永乳業の粉ミルクを飲んでヒ素中毒になった。影響で障害はより重いものになったとみられ、

学校にも通えなかった。厳しいながらも支えてくれた母が2001年に74歳で死去したことが転機に。独り暮らしを始め、03年から「字を書けるようになりたい」と夜間中学に7年間通学。府立桜塚高定時制に進み、昨春卒業した。2年



病院での歩行訓練の合間に理学療法士と談笑する渡辺さん(左)。「まだまだ人生を楽しみたい」と語る(7日、大阪府豊中市で)＝里見研撮影

前から、通所する福祉施設の広報紙にコラムを連載、日常生活や思いを比較的動く右の中指と親指で携帯電話に打ち込んでつづる。

「漢字が読めるようになり、文章も少しはうまくなってきたかな。友達もでき、学校に行けて良かった」

渡辺さんの目標は、「母より長く生きたい」。それが恩返しだと思っからだ。

被害者団体に活動
障害児施設園長に

被害者の一人の和歌山県橋本市の藪本弘子さん(60)は今春、市役所を定年退職し、障害のある子供たちが通う市内の児童発達支援セ



「つくしんぼ園」に通う子どもとふれあう藪本さん(8日、和歌山県橋本市で)＝三島浩樹撮影

ンター「つくしんぼ園」の園長に就任した。

後遺症はなかったが、看護学校への入学を機に、重い障害を抱える被害者がいることを学び、被害者団体に支援活動を始めた。

保健師として乳幼児健診に携わった経験から、「障害児に身近な施設で教育を受けさせてあげたい」と、仲間と1995年に同園を

森永ヒ素ミルク中毒事件 西日本を中心に1955年、ヒ素が混入した森永乳業徳島工場製の粉ミルクを飲んだ乳児が発熱や下痢などの中毒症状を起した。厚生省(現厚生労働省)はその後、死者を除き全員が治癒したとしたが、69年に肢体障害などの後遺症が起きていることが判明。73年に同社が治療費などを負担することが決まり、同社はこれまで約534億円を負担。公益財団法人「ひかり協会」が被害救済にあたっている。

開設した。「事件で障害が生を歩めたかもしれない」残った人も、早期に専門治療を受けていけば、違う人が今の活動を支えている。